

天天中文シリーズ講座：中国語でキャリアアップ！

「中国語でキャリアアップ！」は中国でキャリアを発展させる各界の方々に、仕事の現場や中国語学習法についてお話を伺う「天天中文」のシリーズ講座。中国の各界で活躍する皆さんに、仕事や生活のリアル体験をお伺いします！

第4回（2021年12月23日）

ゲスト：加藤伸悟さん

1986年生まれ、栃木県出身。中国での生活歴11年。会社員。慶應義塾大学を卒業後、海外での就職を目的に北京へ。香港系、北欧系の上場企業2社で唯一の日本人スタッフとしてアカウントマネジメントや技術営業、事業開発などを経験。現在は、日中合弁の不動産管理会社で法人営業、ビル管理などの業務に携わる。またライフワークとして音楽活動を継続中。バンドのドラマーとして、中国での音楽フェス出演や、全国ツアー開催、ロシアでのイベント出演などの実績がある。

ゲスト：永江兆徳さん

1988年生まれ、大阪府出身。会社員。中国人の父と日本人の母のもとに生まれるが、生活拠点が日本だったため中国語は堪能ではなかった。慶應義塾大学卒業後、京都府へ入庁。2015年から3年間北京に駐在。自治体を切り口とした国際交流に従事、この間、中国語の勉強にも励む。帰任前に中国人の妻と結婚したこともあり、中国への移住を決意。現地採用社員として、2019年からJTB北京に勤務。2021年、日系メーカーに転職。

<お話の流れ>

中国の就職を選んだ理由/現地での業務内容/日常生活も現地化/ケンカは何語で？/日中の生き方の違い/温かい家族たち

中国での就職を選んだ理由

天天中文：まずお二人にお伺いしたいのですが、日本でも就職の機会がたくさんあるお二人が中国にいらしたというのは、やはりお嫁さんがらみ、ということが大きいのでしょうか？

加藤：そうですね、東京にいて今の北京人の妻と遠距離恋愛をしていた2年くらいの時期もあったのですが、私は以前、中国で勤務していたこともあり、サラリーマンでしたので、中国でもまた仕事はできるかと思いました。妻が北京で仕事をしているというのもあるのですが、やはり中国のダイナミズム、東京などに比べても社会の変化が激しい、そういうった

環境は今の年齢、今の時期にしか体験できないことと思い、自分のキャリア、今後の仕事を磨きたいというのも大きな理由になりました。

中中天文：ステージとして「中国というのは面白い」というのが直観的にあったのですね。永江さん、同じ質問ですが、いかがですか？

永江：私は大きい転機が2回ほどあったのかと思っています。私は大学を卒業して京都府に入りました。そこで普通は京都府内で仕事をする、遠くても舞鶴、東京への派遣くらいかと思っていたところ、4年目でまさかの中国赴任の辞令がでました。そこでようやくまた中国と縁ができ、中国語を話さないといけないようになりました。任期は3年と決まっていますが、今の妻とつきあい始めたのが残り1年になった時期だったのですね。帰国するまでに何とかしたい、という思いがあり1年間つきあって日本に帰る前に結婚することができました。こうして中国人のお嫁さんをもらったのですが、妻が日本の環境になじめなかったのです。そこでまた大きな決断を迫られることになりました。転職をするのか？中国に戻るのか？よくよく考え、ケンカもしつつ、そしてまた中国に帰ることになったのです。中国でこれから生きていこうと思っているのですが、やはり成長が目覚ましく、また北京ということもあり、チャンスもいろいろありますし、変化を見ながら、それを楽しく感じながら生活しています。

天天中文：きっかけはいろいろあるけど、中国は面白いな、というところですね。私も商社勤務から中国の活気にひかれてここで起業をして今日に至っています。若い世代のお二人の話に改めて刺激を受けますが、お二人はいまのお仕事はいかがですか？加藤さんは不動産関係ですが、今中国では多くの不動産会社の危機が報道されていますが、どうですか、影響はありますか？

現地での業務内容

加藤：そうですね、不動産業といってもたくさん種類がありまして、まず僕の仕事のご説明をしたいと思います。既存のビルの運営管理の仕事をしていて、資金を調達して新しく開発するわけではありません。ですので、現状では恒大集団の直接的な影響などはありません。景気の影響はもちろんあって、いまビルのリーシングを担当しているのですが、ビルのリーシングはコストも大きいですし、とても手間がかかるので、各社さんとしては大きな決断になるのですが、特に日系企業さんには縮小の動きがあったりもします。でも北京は中国の首都ですし、政治の中心地というのもあるので、完全撤退というのではなく拠点を残しビジネスを継続しつつ、日本側の働き方改革、オフィス縮小などの動きとあわせて固定費用を削減しようという傾向はひろくみられます。なるべくスリムにということで、現地化も進んでい

ます。

天天中文：話は飛ぶのですが、昨日、幼稚園児の子供がいる人と飲んでいたら、費用が毎月7000元もかかって大変だ、とこぼしていました。

加藤：まわりに聞いてみると、国際幼稚園など、中国語、英語などを学べる国際的な環境だと1万元以上も状態化しているようですね。先ほど雑談で中国人のエンゲル係数が下がっている、というお話がでましたが教育のエンゲル係数はとてもあがっている気がしますね。

天天中文：教育費がかかるから食費を抑えているのかもしれないですね。永江さんは、いまはどんなお仕事なんですか？

永江：私は今年転職しまして、日系ビールメーカーで働いています。ビールの営業で、大きく分けると2種類あり、我々の業界では「オン」「オフ」と呼んでいます。「オン」はレストランや居酒屋での生ビールを中心とした消費、「オフ」はコンビニやスーパーで買っただいたいの、家での消費です。中国でもコロナの影響で「オン」のほうはレストランがつぶれたりもしているのですが、凄いと思うのは、つぶれてもすぐ次の新しいお店が入ることですね。こちらの資金パワーは凄いと思います。「オフ」のほうはいま売り上げが増え成長中で、来年も売れるよう、PRなど様々な施策をとっていきたくないと頑張っているところです。営業ですので、自分が広告媒体となり、毎日売り込んでいきたいと思っています。

天天中文：日本だとビール会社の営業は命がけでやっていますよね。半分くらいの方が肝臓を壊しているようなお仕事ぶりですが、中国ではいかがですか？

永江：そうですね、中国でもウチは日本の会社の風土というのがありますので、本当にみんなよく飲みますね。私もこの半年くらいは健康に気をつけていかないと、と思っているところです。

天天中文：転職されたというお話ですが、その前は何をなさっていたのですか？

永江：2019年から2020年の2年間、JTB北京に勤めていました。ご存知のとおりコロナ禍の影響がありましたので、それまで順調だった会社もしんどい状況になりまして、これからどうしていこうと思っている時に現在の勤務先の募集があったので応募しました。今年は人生で初めて営業マンをしているという状況です。

天天中文：キリンさんはこちらで生産はなさっているんですか？

永江：はい、しています。基本の「一番搾り」は南部の珠海で生産しています。なぜ南の方
に工場があるかというと天然の軟水が採れるいい場所があるということで。北の硬水を使
うとあわないということなのです。それがいま日本の工場と同じ基準でつくられているの
で、日本で飲む「一番搾り」と中国で飲む「一番搾り」はほぼ同じ味なのです。それがウチ
の会社の強みですね。「一番搾り」以外、季節限定の「とれたてホップ」などは、すべて輸
入です。

天天中文：ちなみに御社のライバル会社のAさんは、中国にも生産拠点があるのですか？

永江：ありますね。以前は北京にも工場があったのですが最近撤退されましたので、それは
追い風になるかといま頑張っているところです。

天天中文：私はA社も永江さんも友達なので、自宅では半々ずつ飲むようにしています(笑)。
それにしても2020年は街中がシーンとしてもうどうなるかと思いましたが、いまは永江さ
んがいうように次から次へ新しい店がオープンしている、中国の復活は凄いですね。

加藤：不動産業の観点から補足をすると、路面店で場所がいいところというのは、常に順番
待ちの状態なのです。場所がいいところはウェイティングリストがあって、みなさん半年く
らい待っていたりします。そこで賃料を払える体力のあるところが残り、払えなくなったと
ころは淘汰されていっています。

日常生活も現地化

天天中文：なるほどですね。さて、仕事の話はこのくらいにして、お二人のふだんの暮らし
ぶりはどんな感じかお聞かせいただけますか？例えば朝ごはんは何を食べる、など身近な
ところからお願いします。

加藤：そうですね、割合でいうと7割中国、3割日本、くらいだと思います。食の現地化を
図っているので、たまに魚を食べたりすると、とても有難みがあります。日本だと魚をスー
パーで買って2日に一度くらい食べていたのですが、北京の土地柄、なかなかそういうこと
もできないですね。朝や、お粥、それにみなさんご存知かどうかかわからないですが「油条」
という揚げパンを食べたりしています。日本の揚げパンは甘いですが、こちらの「油条」は
しょっぱくて、それをお粥に浸して食べています。北京の朝ごはんです。

永江：私は朝ごはらは、最近はお酒を飲んで二日酔いのことも多いので、最近はお粥が多い
かもしれませんね。体調がよいと中国で有名な肉まん屋さん「慶豊包子」に行ったり。種類

が多くておいしいですよ。こちらでは中華が安くてびっくりしますね。最近、日本でもお店が出始めた蘭州ラーメンもこちらで食べると1杯15元くらいです。昔は10元くらいだったらしいです。

天天中文：私のひと昔前のイメージだと「蘭州ラーメン」は1枚2元くらいで食べるもの。だから物価のあがり方にはしていますが、そのぶん所得もあがっていますよね。普通の大卒で8000元くらいでしょうか。あれだけ食費が安ければ貯金もたまるだろうと思うけど、住宅がやたら高いですからね。食料品はあげられないのかもしれないですね。

ところでお二人の中国人の奥様について、どうでしょう、一般的によく怖い、なんて言われていますが、いかがですか？

ケンカは何語で？

加藤：そうですね、地域性もあるかもしれないですが中国人女性は気が強い、と言われますよね。私の妻は、北京出身で、仕事も関係しているのかもしれませんが、とにかく主張してくるので、一日1回以上は何かしら意見がぶつかる感じです。ただ、いいところは、これまでの日本人の方、中国人の方とのおつきあいを比べると、日本人女性のほうはがまんしてしまうことが多いのですが、中国人女性は嫌だったらその場で嫌、といい、ケンカにもなるのですが、それでは、こうしよう、ということになってもう終わり、根にもたないところが楽ですね。

会員：お二人は奥様とのケンカは何語でなさるのですか？

加藤：中国語ですることもあるのですが、たまに英語ですることもあります。妻がイギリスに留学したことがあり英語で返ってくることがあるんです。そういう時には僕も英語で返したり、中国語で言えないことを英語で言ったりします。日本語はまだ妻が口論できるほどではないので、日本語ではケンカしないようにしています。

永江：ウチの妻は山東省出身なのですが、これまた気が強くて、やはり妻の言うことをきいたほうがうまく収まるんではないかな、と思って暮らしているんですけど、加藤さんのおっしゃったことと同じで、中国人って思ったことをすぐ言うんですね。だから翌朝になるとケロッとしています。黙っていたり、我慢していたり、ということがなく、今、何をしてほしいかを言ってくれるので、やりやすいなど。もう慣れてしまいましたね。

日中の生き方の違い

天天中文：お二人は中国人と日本人の生き方、そのメンタリティの違いをみていて、今度生まれてくるとしたらどちらに生まれたいと思いますか？

加藤：どうでしょう。僕は中国に来てから日本人らしさ、というのを意識するようになって日本人であることに誇りを持ち、日本という国が好きになりました。ただ異なる文化圏に興味があるので、中国の少数民族、四川省や雲南省の山間部にいる少数民族に生まれたらどうなるのか興味があります。

永江：私はどっちが楽かな？と考えてみましたが、たぶん中国人の生き方って気軽というか身軽な感じがしますよね。何を言っても反応が早くて、ああいうリズム感に触れると、たぶん彼らは楽なんだろうな、と思います。でも、僕は日本で生まれて日本で育ってきているのでいまだにそれはできないなあ、と。中国人として生まれたら中国人どうしのやりとりってスムーズで楽なんだろうなあ、と思います。

天天中文：いま、中国で暮らして一番困ることはなんでしょう？

永江：私が一番困っているのは、将来的に家を買えないのではないか、ということですね。中国では持ち家の方は日本人に比べてとても多いので。

加藤：中国では男性が家を持っていることを結婚の条件にすることが多いですが、永江さんの場合はそういうことはなかったのですね？

永江：幸いなことになかったのですが、そうすると今後どうしよう、という悩みがいつもつきまといます……。

加藤：それは奥様のほうのご家族からのプレッシャーですか？

永江：ありますね。

加藤：そうすると、それは北京から離れるか、あるいは買えるところで買うとかになりますよね。北京では、かなり稼いでいる方でも自分の能力だけで買える人は非常に少ないですよ。銀行ローンの金利はかなり低くても、準備すべき頭金の割合が高かったりするので、新婚家庭の場合、両家からの支援で購入するケースが多いと思います。不動産の価格上昇率は下がっているとはいえ、良い学校や病院などが集まる北京、上海、広州の需要は今後も底堅いのではないかと思います。

温かい家族たち

会員：奥様の中国のご家族とはどんなおつきあいなのでしょう？中国では毎週末、両親のところへ行くような濃厚なおつきあいもあるようですが、そんな感じでしょうか？あるいは年に一回、旧正月にいく程度の割とさっぱりとしたおつきあいでしょうか？

加藤：車で30分くらいのところに妻の両親が住んでいます。そうですね、「来い、来い」というわけではないのですが、やはり待っているような感じもありますが、でもたまに様子を見に行くような、ほどよいおつきあいです。妻の父は中国中央電視台でドキュメンタリーを制作する仕事をしていて「用事がなければそんなに来なくてよいよ」というようなオープンな考えの方なので気楽です。そして日本への造詣が深い方なので行ったら行ったで楽しく、日本文化などの話をしています。義理の母は以前日本に住んでいたことがあって、実は妻も南千住に住んで公立小学校に通っていたこともあります。妻の叔母にあたる方も今も日本に住んでいて、日本に縁のある家族なので。

永江：私の妻は北京ではなくて、山東省の省都・済南からバスに乗って1時間半、そこからまた小さなバスに乗って約1時間、というところに住んでいるので、北京から移動すると半日仕事なんですね。そんなに頻繁に帰れないので年に1回か2回、旧正月や国慶節に帰ることになります。帰ると毎日、親戚同士の飲み会です。同じ地域に親戚が集まっていたりするので、親戚の人数がものすごく多いんですね。何十人もいて、ある日はこちらの親戚の家に行って、翌日は別の親戚の家に行って、次の日は別の親戚が家にきたり、そんなことを延々とやり、白酒を飲み続けます。女性はあまり飲まないのですが、男性は一つの部屋に固まって延々の飲み続けるので、もう何年も連続で何回も酔いつぶれています。体に悪くてしんどいなあ、と思いながらも田舎に帰ってますね。

加藤：でも、そういう賑やかな経験は僕にはないです。うらやましいような気もします。

永江：一つ、問題なのは、私、相手のご家族の話していることが聞き取れないんですよ。みなさん、いわゆる「普通語」を話せないんです。私が話す「普通語」はなんとか聞き取ってもらえるのですが話すことはできないんです。それで妻が彼らの方言を普通語で通訳してくれます。私は日本人の母を妻の実家に連れていったことがあるのですが、これがまた大変で。母は中国語ができないので、私が母の日本語を中国語に直し、妻が私の中国語を田舎の言葉に変換する、という二重通訳という経験をしました。

天天中文：永江さんの奥様は日本語はできるのですか？

永江：いえ、妻は日本語はできないので、ケンカも中国語でするようにしています。日本語でケンカしようとするとう怒られますね。

天天中文：それは、うまくなりますね。

会員：お二人は先方のご家族に言われたことで何か印象に残っていることはありますか？

永江：そうですね、言葉というより、その地域に外国人が珍しかったみたいで、日本人が来た！とみなさんおっしゃっていたのにびっくりしました。妻と結婚することになって、日本人の旦那さんをもらった、ということになるので彼らとしては自慢というか、ウチには日本人がいるんだぞ、というムードになっています。歓迎されて私としてはありがたいです。

加藤：印象に残った言葉は、いますぐは思い浮かばないのですが、もともと日本に縁のある方だったということもあって、割にスッと入っていけました。日本というと、歴史的な経緯もあって、結婚というと嫌な思いをしたり、反対意見もあるのではないかと、という心配をする方もいるかと思いますが、私の場合は、そういうこともなく、相手の家族に受け入れられているのは大変ありがたいことだと思っています。

***この後、中国語の勉強法やお二人の将来の計画などをめぐる会話が続きました。

文：JEIS

